

タイのエイズ対策の再評価 スティグマと差別の視点から
Reevaluation on the AIDS Policy in Thailand:
From the Perspective of Social Stigma and Discrimination

現在、世界で HIV に感染しているのは約 4000 万人と言われ、医学的にも社会的にも大きな問題として、一刻も早い解決と、そのための有効な対策が求められている。

このような状況において、HIV 新規感染を減少させた「成功モデル」として国際機関等から評価され他国の手本と捉えられてきたのが、タイ政府が 1991 年から NGO らと連携して大々的に実施した感染予防キャンペーンである。しかし同対策には感染者へのスティグマ・差別という「副作用」があったと指摘する研究もある。本稿では、そのスティグマ・差別の存在が、人権的観点からも、さらには HIV/AIDS の水面下での蔓延を助長するという疫学・公衆衛生的観点からも、無視できない問題であると考え、国際機関等が評価の基準から捨象してきたそれらの質的な問題に着目してタイのエイズ問題を捉え直し、対策の再評価を行うことを目的とした。

まずはタイにおける質的エイズ問題の経過を追った。その結果、90 年代初頭の予防対策はタイ社会における HIV/AIDS 関連スティグマ・差別を増幅させ、感染した人々が表に出ることを躊躇させていたことがわかった。しかしそのスティグマ・差別が、タイでは 90 年代後半から緩和の様相を見せていることも明らかになった。あまり注目されることのないその事実を本稿では「隠れた成功」と捉え、その存在を考え合わせて初めてタイのエイズ対策を「成功」と評価できると考えた。

したがって次に、その「隠れた成功」、すなわちスティグマ・差別の緩和がいかんにして可能となったのかを探った。その際、タイ国内でエイズ問題に取り組むアクターである NGO、政府、感染者の動きに着目して考察を行った。その結果、スティグマ・差別を軽減させた要因が二つ明らかになった。一つ目は、NGO によるコミュニティへの働きかけである。その中でも特に、コミュニティが感染者を受け入れることで問題が解決に向かうように働きかけたということが、他国にはほとんど見られないタイの NGO 独自の特徴であることがわかった。もう一つは、感染者がカミングアウトするようになったことである。当初は周囲に感染を隠していた感染者たちが公の場に姿を現し、権利を求めるとなるという変化が見られたのである。これには、一つ目の要因である NGO 活動によるコミュニティの変化や、感染者が自発的あるいは NGO の支援を受けて始めた感染者グループの活動による影響があったと考えられる。また政府に関しては、これら二つの要因を支えていた「背景」としての役割が浮かび上がってきた。差別緩和のための直接的施策は特段の効果を持たなかったのであるが、NGO や感染者グループへの支援を通じて、意図の範囲外で結果的にスティグマ・差別の緩和に貢献したのである。

最後に以上を踏まえ、他国がタイのエイズ対策をモデルとして導入するのであれば、コミュニティが感染者を受け入れるように働きかける NGO 等の活動や、感染者をカミングアウトに導く NGO や感染者グループ等の活動を育て支える施策を、予防対策とともに採用する必要があるという知見を提示した。